

早稲田大学
図書館所蔵

『竹園抄』の位置

——寛永版本および『長短抄』の比較から——

梅 田 径

一 はじめに

『竹園抄』は藤原為顕（生没年未詳）が藤原為家（一一九八～一二七五）の教えを記した歌学書として中近世を通じ広く受容されてきた。おびただしい写本の現存がそれを物語る一方で、その内容はとても為家の教示によるものとは考えられず、『新撰帝説集』や『玉伝深秘卷』（『阿古根浦口伝』等）と共通する記述をもつ所から、現代では為顕流と呼ばれる鎌倉時代に活動していた末流歌道家の一書として理解されている⁽¹⁾。

『竹園抄』については久松潜一⁽²⁾、三輪正胤⁽³⁾らの先駆的な業績があり、為顕流についても、『毘沙門堂本古今集注』にまつわる研究の進展や、石神秀晃⁽⁴⁾、海野圭介⁽⁵⁾らの精力的な研究によりその実態が徐々に明らかにされつつある。しかし、『竹園抄』の伝本系統となると、膨大な伝本群と複雑な本文異同に遮られて全体の系統をたてるまでには至っていない。鎌倉期に遡る伝本としては、尊経閣文庫蔵本（以下「尊経閣本」）、国文学研究資料館蔵久松文庫本（以下「久松本」）、国立国会図書館蔵本（以下「国会本」）の三本があるが、相互に小さくない異同がある。

久松、三輪による成立事情の研究や古写本の紹介といった成果の重要性を鑑みるにしても、鎌倉期写本以外の研究

『早稲田大学図書館紀要』第六十七号（二〇二〇年三月）

はほとんど行われていないのが実情である。『竹園抄』は古来重用されてきただけに現存伝本も一〇〇本を優に超えるが、室町期以降の伝本の利用目的や実態に関する理解は未だおぼつかない。⁽⁷⁾ 著者による〈原態〉がどのような形であつたのかを知るだけでなく、その享受の場でどのような本文が選択されたのかという観点に立てば、鎌倉期写本以外にも重視されるべき伝本は少なくないはずなのである。

稿者も以前、伝梵灯庵著の連歌論書『長短抄』と、それに関わる『竹園抄』伝本についての論考を上記の立場から執筆したことがあつた。⁽⁸⁾ その際に比較的『長短抄』に影響を与えたと考えられる『竹園抄』伝本として早稲田大学図書館蔵本（請求記号…へ四 四四二七。以下「早大本」と刈谷市中央図書館蔵本（以下「刈谷本」）を同定し、つづいて浅井美峰氏と共同で翻刻を上梓した。⁽⁹⁾

本稿はその続稿として、『長短抄』に近い本文として早大本と刈谷本の特徴を論じ、さらに早大本系統を『竹園抄』の伝本中に位置づけ、系統分類が難しい諸伝本の問題について論じてみたい。なお、『竹園抄』の書名には複数の異名が存するが、本稿では『竹園抄』で統一する。

二 早稲田大学図書館蔵本と刈谷市中央図書館蔵本

金子金治郎によって『長短抄』には『竹園抄』をまるごと剽窃したような記述があることが指摘されて以来、両書の関係は自明のものとされてきた。⁽¹⁰⁾ だが『竹園抄』の伝本中より、『長短抄』に近い本文を探す試みはなされてこなかった。拙稿でも両書の記述が完全に一致する本文をもつ伝本は見つからず、「春の夜の」詠の有無、白河帝、後鳥羽院の表記、藤原忠輔の署名、「艶書」の異同、散らし書きの書式といった基準を元に、それらの条件を一応満たす伝本として早大本及び刈谷本が候補にあがると述べたが、国文学研究資料館蔵木藤文庫本（以下「木藤本」）のように、

『長短抄』と近い冒頭部をもつ伝本もあり、早大本系統のみが『長短抄』に利用されたと断じることができないことを指摘した。⁽¹¹⁾

早大本と刈谷本は、本文上内容的な特徴が一致する点が多く、大きくは同系統とみてよい。しかし「追加」部に相違があるほか、会席図も一致しない。小異を含めると一三一箇所 different があり、相互に欠脱が確認できる。系統内部では近縁の関係にあるとはいえないようである。拙稿で論じたことの繰り返しになるが、まずは同系統を示唆する類似点について確認し、その後小異を含めた相互の異同について記述したい。⁽¹²⁾

まずは内題の一致である。早大本と刈谷本の内題は次の通りである。

〈早大本〉

竹苑抄

五音相通連聲読調次第

〈刈谷本〉

竹苑抄 一卷

五音相通連聲読哥次第

刈谷本では内題に続いて「一卷」とあるが、「五音相通連聲読哥次第」の内題を持つ伝本は他に管見に入らない。寛永版本では「竹園抄目録」とだけあり、実質的に目録題しか存しない。

次は歌の欠落である。早大本系統では「六返事跡事」の例歌が八首となっている。寛永版本に代表される流布本系統では一二首となっており、早大本系統では「おなしほとの人の哥の返事」中の四首が欠落している。鎌倉期写本も三本とも一二首になっているので、欠落と考えるのがよい。

〔寛永版本〕

二におなし程の人の哥返事、

しるらめやいく秋をくる七夕も

ちきりしころは忘れぬ物を

と有かへし、

七夕のとしにわすれぬちきりさへ

よそにおもはぬためしなりけり

又かくのことく、

忍ふ山しのひてかよふ道もかな

人のこゝろのおくもみるへく

とあるかへし、

忍ふ山しのふかひこそなかりけれ

人の心のおくのあさゝに

又のてい、

あちきなくこは何事のむくゐにて

つらき人しも楽しかるらん

と有返事に、

何事のむくゐならなんつれもなき

人を忘れすこひわたりつ、

一方で、早大本系統では、次のようになる。

〈早大本〉

二おなしほと人の哥の返事に、

しのふ山忍ひてかよふみちもかな

人の心のおくもみるへき

返事に、

しのふ山しのふかいひこそなかりけれ

人の心のおくのあさゝに

このように早大本系統では、「おなし程の人」への返歌一例四首を削除して一例二首に整理したのだろう。刈谷本も小異あるもののほぼ早大本と同文である。

三点目は「十一風躰十様有事」の末尾に付された識語である。これは流布本系統の訛伝と思われ、早大本・刈谷本がほぼ同文を載せるのは類縁関係を示すものとみて誤らない。後述する。また、項目の分節や、和歌懷紙の書式的一致など細々した点でも両書は相当な一致を見せる。

最後の点は五音図である。これも若干の異同があるが五音図に付随する形で「宮商角徵羽」の五声を記している。これは他の伝本には見られない。『長短抄』では五音図は略されているものの、より詳細な五声図が付属している。連歌論書の『連通抄』にも簡略な五声図が記されており、¹³⁾室町期に地下連歌師たちの間で五声・五音が秘儀として相伝されていたと考えられる。『竹園抄』もまた、五音図と五十音図を併せて伝授されていたのではないだろうか。そ

うだとすれば、これらの図は『長短抄』との関係を間接的に示すものとなり、『竹園抄』は為家―為頭の權威による歌学書という性質に留まらず、地下連歌師間での受容がなされていたことを示唆する。

以上、四点の特徴について記したが、特に三・四点目の条件を満たす伝本は他にはない。これは両書を同系統と見なす大きな根拠となる。

一方で、両書の異同中には同系統とは思えないほど著しい違いがでることも少なくない。やや煩雑であるが、両本の主要な異同を次に掲げる。前号の早大本における翻刻頁数を基準とし、「早大本―刈谷本」の形式で記した。

- | | |
|--|-------------------------|
| 一. 古人おほく哥の名をつく―哥の病と名付て古人のおほく記
す処なり (p. 113) | 一二. さためられ―さたあり (p. 115) |
| 二. ナシ―七病七妄八悩 | 一三. めんほくなき―おもしろくもなき |
| 三. ちかく―近代 | 一四. 他准之―これらにて心ふへきなり |
| 四. 詞おほくて―ことは多して | 一五. もりなり―くもりなき (p. 116) |
| 五. 言葉にまとひぬへき―迷ぬへし | 一六. 月の前の花といふ題にて―ナシ |
| 六. あまたありて―あまりて | 一七. 花―桜の花 |
| 七. なをしことは―同じ言葉 | 一八. 和哥にいはく―本哥にいはく |
| 八. てにはの字もしは―はの字に (p. 114) | 一九. 思ひきや―おもひ |
| 九. きこふへき―きろふへき | 二〇. 物おもふ―ものをおもふ |
| 一〇. かまへ―かまへよ | 二一. すな―する |
| 一一. 理―文理 | 二二. 哥を―哥をは (p. 117) |
| | 二三. さくはな―咲くちる |

二四、是について—是につゐして

二五、ふく風も—ふく風に

二六、対するなり—対する

二七、大かたを—大かた

二八、略する対なり—略する (p. 118)

二九、あまきる雪の—あまきる雪に

三〇、下句に對せねとも—句に對せねとも (p. 119)

三一、二二五音連聲なり—連声なり

三二、うつりのひゝきなり響のされつる—うつりのひゝきのき
れつる

三三、きなくなり—来鳴かり

三四、二—二には (p. 120)

三五、こと葉されたる—言葉されさる

三六、よむと—よむこと

三七、吉野山といひて—吉野山といふて

三八、散といひて—ちると

三九、花とある—花月

四〇、よき哥—はるゝといへともかくのことく読んは能哥

四一、みえぬまに—見へぬまで

四二、たちかくしけり—たちかへしけり

四三、おなし—うち

四四、秘事也—秘事なるが (p. 121)

四五、王なき—なき

四六、得給たれは—請給たれは

四七、御事聞えねとも—御事と^{やう}へねとも (p. 122)

四八、底は—底には

四九、諷と云は—諷といふはたとへなり是は

五〇、ことくに—ことく

五一、あちきなさ—あちきなさ

五二、つかひ—通ひ

五三、文記—天記

五四、菴蓬已無常—蜚食蓬已無常

五五、比哥は—比哥

五六、二ついづれも—二色も

五七、きえや—きゝや (p. 123)

五八、いそれ—いづれも

五九、ほむるおは—ほむる祝をは

六〇、道州は—道州とは (p. 124)

六一、依て—依る

六二、三葉四葉は—三葉四葉

- 六三、にいへり—にいれり
- 六四、かされとも—かわらすして
- 六五、こと葉をかふる—言葉はかふる
- 六六、月やあらぬ—花やあらぬ (p. 125)
- 六七、たつねみへし—尋見るへし
- 六八、哥の事す—哥の返事 (p. 126)
- 六九、なかは—中を
- 七〇、あふむ返事—あふむかへし
- 七一、是かならす—ナシ
- 七二、返事に—返事
- 七三、哥の返事に—哥に
- 七四、返事に—返事
- 七五、返事に—返事 (p. 127)
- 七六、あさ、に—あたしに
- 七七、哥の返し—哥
- 七八、あかぬ—なかぬ
- 七九、鸚鵡返事—鸚鵡かへしのうた
- 八〇、いふならは—いふなみは
- 八一、はなやおもはし—いなやおもはし
- 八二、を、くし—お、くして (p. 128)

- 八三、落題といふ—落題と云は
- 八四、題にては—題にて
- 八五、よしをよめは—よし読は
- 八六、山家すまひ—山家の住まひ
- 八七、名月の題をつねの月によりぬれは落第となるなり名所の心なければ落題となる物なり—名月の題を常の月に読みぬれは落第となる物なり
- 八八、本哥—本読
- 八九、家の落たひ—山家の落題
- 九〇、所からにて—処からにぞ (p. 129)
- 九一、うらの外—うちの外
- 九二、哥をは—うたをも
- 九三、少々—少
- 九四、まことによき哥—まことの哥
- 九五、つねに人の—人の常に (p. 130)
- 九六、題をよく心得へし—題をはよく心得へし
- 九七、それも近代は—夫もまた近代は
- 九八、両家—二家
- 九九、一紙にかくへきなり—一紙に書なり
- 一〇〇、のあい—の間

一〇一. 題の首を書へしく文字の題も—題を書^{云々}文字の題も

一〇二. 題と詠との間に—題詠との間に

一〇三. 名はかり書へき也—名はかり書なり

一〇四. 上下二行に書へき也—上下二行に書へし (p.131)

一〇五. かなにまざる、也—かなまざる、こと多し

一〇六. すそわつかにさしけて—すそ路にさしあけて

一〇七. 詠哥松祝和歌—詠寄松祝和哥 (p.132)

一〇八. 君か代の—きみか代も

一〇九. 書と、むる—書とむる (p.133)

一一〇. つゝみて左右なく文臺ををかすかたわらにおくなり—

つゝみおくなり

一一一. 文臺ををかぬ—文臺はおかぬ

一一二. 人のもと—人の所

一一三. さしはらひて—さしはからいて

一一四. 懷紙様—懷紙躰

一一五. 人丸を右に—人丸を (p.134)

一一六. また左のきはに円座あり講師の也—中に礼盤有式師の

為なり

一一七. 座敷事図部楽なり—ナシ

一一八. 式はおわりて—式おはり (p.135)

一一九. こゑおのへて—こゑのへて

一二〇. かさねたる懷紙を—かさねたる懷紙と

一二一. こひて事をさたむへし—こひたるをさたむへし

一二二. 読師何首を—読師の何首を

一二三. つきかたには—つきには

一二四. つきに哥をかりて—つき哥にをはりて

一二五. あなり地に—あなち (p.136)

一二六. 葦は—葦など

一二七. 風吹かは空によこきる—風ふけは雲によこきる

(p.137)

一二八. たとへつゝ—単つゝ、 (p.138)

一二九. この十躰—此躰

一三〇. たまへるなり—たまふなり

一三一. 言—言葉

追加とおぼしい「五音次第」以下は省略する。本文には大小一三二箇所の主要な異同があり、表記の相違や書式の相違をとると両書の距離はさらに広がる。一四の「めんほくなき」と「おもしろくもなき」のように漢字の仮名への

変換が起因となる本文の相違があり、両書は——遠い関係にあるにせよ——共通する祖本が想定できるように思われる。一方で三のように早大本に情報欠落する例もあれば、一七、七二のように刈谷本に欠落が想定されるケースもある。総じて言えば早大本は情報量が若干多いようであるが、誤字脱字も多く、書写態度は謹直ではない。一方刈谷本は虫損が多いこともあって判読に悩む点もあり、また早大本に比べると目移りや脱落が多いように思われる。結局本文の性質について言えば一長一短でどちらかが明確に善本であるとは言えない。利用に際しては、相互に参照・校合しながら適切に異同を考慮するのが望ましい。

なお、筆跡や紙の状況からみて、書写年代は早大本のほうが早く、江戸中期とみられる。刈谷本は村上文庫蔵本で、料紙は厚手の楮紙で虫損が甚大である。江戸後期の書写にかかる。

三 流布本との関係

次に識語の問題から早大本系統と流布本系統との関係を考えてみたい。いま早大本に従って引用する。

〈早大本〉

此外は、善白等の鉢あり。ならふへし。是は家の秘事なり。初心の為にしるす也。ゆめ／＼他見あるへからず。為頭入道殿の御子為家卿小童の時、竹苑苑にておしへたまへるなり。又為家卿、民部卿入道殿言を書給ともいへり。是はさらに世間に披露なき書なり。よく／＼可秘義也。

刈谷本とは異同が二箇所確認されるにすぎない。この識語では為頭の子息の為家が、民部卿入道の言を書いたと読める。ただし、この人間関係に事実誤認があり、本来は為家の子息が為頭である。

先に述べてしまえば、この識語は流布本系統の識語を誤読したものと考えられる。

〈寛永版本〉

凡哥おほしといへ共、此十に過ぐべからず。此外、外善内善とて十体有、ならふべし。不可命他見。善白等は家の秘事なり。

凡、這抄は最極秘事の雖口伝、初心のために書きおく処也。為頭入道殿小童の時、竹園にてをしへ給へる民部卿入道殿の言葉を、為頭殿のかきあつめ給ふなり。世間に未披露物也。穴賢、不可有外見、可秘。竹の苑にて御子にしへ給へる為家の詞なり。仍号竹園抄者なり。

この識語では為家が為頭に竹園で伝授した詞を基盤に据えていると述べている。早大本の識語では「民部卿入道殿」が為家であるという事を理解しておらず、「為家卿・民部卿入道殿」という文のつながりになってしていると読める。やや本文が損壊しており文意が不明瞭だが、「これは為家（が）民部卿入道の「言」を引いた」ものでもあると理解されていたと考えておきたい。この誤解は御子左家の家員構成に対して無知であつて、しかも「為家」ではなく「為頭」が權威の由来になっているという点で二重に興味深い。このような誤謬が生じたのは「民部卿入道」を為実とみなしたからなのではないだろうか。為実は為頭の兄弟である為氏の子息なので、為頭からみると甥にあたる。為実は『竹園抄』の伝流に関わつたらしく、久松本の伝承筆者としても伝えられる。また、今川了俊の『了俊聞書』に『竹園抄』の著者としてあげられており、『竹園抄』諸本の奥書を分析した三輪の論からも為実の重要性は裏付けられている。⁽¹⁴⁾

識語は諸本間で大きな異同がある。そもそも最古写本の一つと考えられる久松本ではこの識語自体がない。尊経閣本では為頭・為家の名前が出てこない。だが、鎌倉末期写本の一つである国会本には次のような識語が見られる。

〈国会本〉

此外、黑白等の鉢あり。ならふへし。これ家の秘事也。初心のためなる、努々不可有他見。為家の入道殿、小童

の時、竹苑にて教給へる民部卿入道殿の詞を、為頭の書あつめ給へる也。これは世間にひろめさる書なり。能々可秘也。

小異はあるが、寛永版本の識語は国会本と一致する箇所がある。寛永版本では「竹の苑にて御子にをしへ給へる為家の詞なり」と前半とはほぼ重複する文言があり、他系統の本文を取り込んでいるか、衍文だろう。だが、為家と為頭との混乱は、室町期にはすでに始まっていたようで、木藤本（旧神宮文庫本）の識語は次のようになっている。

〈木藤本〉

此外は、善悪牀あり。習へし。是は家々秘事、為初心也。努々不可有他見。入道小童之時をあらはさん為、竹苑にて教給へり。民部卿入道の詞を為家に書あつめ給へる者なり。これ世間に無披露書也。能々可秘云々。

本書は「連哥師月樵」の書写による室町期写本である。ここでも「民部卿入道の詞を為家に書あつめ給へる者なり」とある。これもまた「民部卿入道」が為家であることを理解しておらず、為家の系図上の位置を誤解していたと考えられる。

四 流布本系統と会席図

ここで、早大本系統と流布本との関わりについて論じておきたい。早大本と刈谷本と寛永版本を比較すると、早大本のほうが流布本に近く、「風傍の病」まで寛永版本とほぼ一致する。一方で早大本と刈谷本と流布本の関係をみると、早大本のほうが刈谷本より文意が通じるものの、早大本には流布本系統との接触が想定されるケースがある。まず、寛永版本の冒頭部分を刈谷本と比較してみたい。

〈寛永版本〉

抑、古人おほく哥の名をつく。いはゆる四病八病等也。しかりといへとも、ちかくきはさる事多し。しかれば、なか／＼徒に詞おほくて、初心成ものは言葉にまとひぬべきゆへに、要をとりて、六のやまひを知せり。一に同詞、二には同字病、三には乱思病、四には風傍の病、五には片題病、六に首尾病。

【校異】古人―ナシ／つく―記す処なり／四病八病―四病八病七病七妄八悩／近く―近代／徒に詞―いたつらことは／おほくて―多して／べき故に―へし故に／六の病を記せり―六病を記す也／同詞―同語病／風傍の病―風傍病／六に―六

刈谷本と早大本の間でも比較的異同が大きな箇所、一一箇所の異同が見られる。

ゴチックにした「四病八病」の箇所に、刈谷本ではつづいて「七病七妄八悩」の記述がみられる。鎌倉期写本三本には「七病」がないが「七妄八悩」についての記載がある。これは『竹園抄』と関わりの深い為禪流諸歌論書や伊勢物語注釈に見られる歌病である。ただし浜成式以下の歌学書に頻出する「四病」「八病」に比べると「七病七妄八悩」の実態は不明で、正統的な歌学書にはほゞみられず、早大本は「七病七妄八悩」を落とし流布本系統との接触が想定される。

とはいえ、早大本と流布本との接触は全編にわたるものではないと思われる。「風傍病」以下では刈谷本と早大本が一致する傾向が強くなり、寛永版本とも異同が確認できるようになる。先の冒頭部分は特に流布本系統との接触が想定される部分である。

早大本と流布本との接触は会席図からも窺える。すでに前号の翻刻で図版を載せた（二四三頁）が、早大本と刈谷本では大きく異なる会席図が載せられている。

刈谷本では机上のしつらいを絵で記すが、早大本では「花瓶・飯命人丸・菓子可有・飯開具・花瓶」と文字で記さ

れる。刈谷本では左右の花瓶のうち左が立花、右は鳥（鶯か）となっている。図1と前号所載の早大本の会席図を比べて見ればわかるとおり、早大本の会席図は流布本とほぼ同じである。同種の会席図を持った本には国文学研究資料館蔵松野本等があり、室町期にはすでに広く流布していたようである。

図1は寛永版本の会席図で、早大本はごく微細な違いがあるが、これとほぼ同一である。対応する文章も刈谷本と早大本で異同があり、図と本文の対応とも関わるため、ここで確認しておきたい。

《早大本》

まつ人丸を右に懸、高貴大明神を（住吉・玉津嶋）左に書へし。その外の影ともあらは、官家階にしたかひて、左右にかくへきなり。明神人丸の前に文机を置つねのことし。花瓶香爐燭臺菓子壇供等常のことし。机の前に文臺をすゑへし。文臺の右に円座をしくへし、読師の座なり。また左のきはに円座あり、講師の也。左右にたゝみをなかくしきて、上臈の座をつくりて、その次に管弦者・伽陀師の座をつくるへし。

《刈谷本》

先人丸をかけ、高貴大明神を（住吉・玉津嶋）左にかくへし。其外の影ともあらは、官家階にしたかひて、左右にかくへき也。明神人丸の前に文机を置常のことし。花瓶香爐燭臺菓子壇供等常のことし。机の前に文臺をすへへし。文臺の右に円座をしくへし、読師の座なり。中に札盤有、式師の為なり。左右にたゝみをなかくしきて、上臈の座をつくりて、其次に管弦者・伽陀師の座をつくるへし。

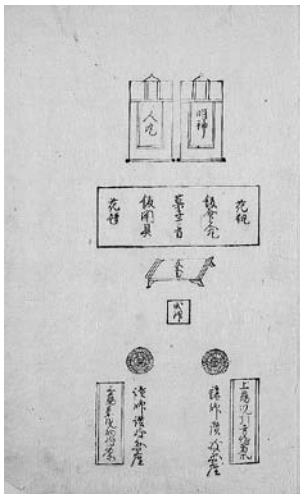


図1 寛永版本の会席図



図3 国会本の会席図

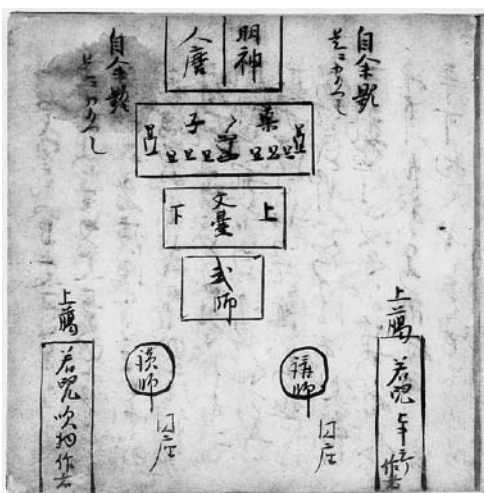


図2 久松本の会席図

〔寛永版本〕

其作法は、先人丸を右にかけ、高貴住吉大明神を左にかくへし。其他多いともあらは、官階に随て左右にかくへし。

其後明神人丸のまへに文臺つねのことし。花瓶香焼香闕伽可備之、壇供等如常。瓶の前に文臺をすへ、ふんたいの左のきはに圓座をしくへし、講師座也。又、右圓座在之、講師座也。左右にた、みをなかく敷、上臈の座左右につくりて、そのつきに管弦者・伽陀師の座をこしらふべし。

刈谷本には「中に礼盤有式師の為なり」の独自の異同があり、また左のきはに円座あり。講師の也」の一文を脱落させる。

早大本と刈谷本で共通するが流布本と異なる本文としては、

「花瓶香爐燭臺菓子」が「花瓶焼香闕伽」になる異同がみられる。

会席図と本文の対応をみる。刈谷本では、式師の左右に円座が二つあり、ともに講師の座となっている。左右の畳と思われる囲みでは、右に「上臈児弦」、左に「上臈児管」とあり、上臈・稚児・管弦者が並ぶ。

寛永版本では、式師の左右下には円座が見られ、右に「講師讃岐円座」、左に「読師讃岐円座」と注記される。左右の畳に

は右「上臈児引方作者等」、左「上臈若児物作者等」とある。久松本では机上が「菓子」以外、香炉や仏具が図で示される。「自余影是ニカリヘシ」とあり、人磨と住吉明神以外の影供が行われる可能性があったのであろう。他の会席図に比べるとやや孤立的な印象も受ける。刈谷本と国会本にも共通する、文台の左右に「上・下」とある点は、刈谷本の古態性を示すかも知れない。しかし左右の「上臈」が畳から出ている等、他本との比較が容易ではない点がある。

国会本では、文机の中央に香炉が据えられ、読師が右側、講師が左側にいる（ただし、「読師」に「左」、「講師」に「右」と注記があるので人丸・明神の掛け軸から見て左右を決めているのかもしれない）。畳も右「上臈 児 弾物 作者等」、左「上臈 児 吹物 作者等」とある。尊経閣本は畳の記述などは国会本に近いものの一致せず、井上宗雄が述べるように成立から早い段階で種々の伝本が発生していたのだらう。¹⁵⁾

図3のように国会本では、式師の前方に円座が敷かれている点も流布本系統とは異なる。刈谷本と早大本の本文を鑑みるに、どちらも「香炉」がある壇供が想定されているようである。国会本の会席図には香炉がある点で早大本の記述と一致するが、円座と式師の位置関係では早大本と久松本が一致し、国会本とは異なっている。

会席図の様相は諸本で本文異同以上に大きな差異をみせる。いまだ網羅的な調査には及ばないが、会席図は系統間で共有されるものだけでなく、異系統との衝突で変容しうることは早大本の例から明らかだ。会席図を基準にした系統分類は危ういのである。また、肥前松平文庫本のように簡略化した図もあれば、木藤本のように会席図を持たない伝本もある。会席図と本文との対応については今後の課題となるが、大きくは文台と机上のしつらいに何を配するかで分かれるようである。木藤本は「花瓶焼香闕伽」と寛永版本と同じ本文だが、書陵部本一本は「花瓶香炉たんく」としか書かれない。本文との対応関係にも様々な位相がある。

刈谷本の図版で「式師」とある囲みに足が見えるのは礼盤と考えられ、本文と対応する。刈谷本では式師の左右の円座が、「円座」と書かれず、共に「講師」になっているのは、「文臺の右に円座をしくへし、読師の座なり。」という本文と一致しない。早大本では「講師の座」となっており、こちらとは一致する。刈谷本の会席図を以て早大本系統の原型とは見なしたいものの、本文との整合性という点からは一定の合理性があり、刈谷本が系統としての会席図の古態を残しているように思われる。これに対して早大本の会席図は流布本系統から取り入れられたと考えられる。強調してきたいのは、早大本と流布本との「接触」は必ずしも寛永版本との接触を意味しないことである。もし寛永版本と接触していれば、「六返事跡事」における二例四首の欠落が埋められたはずであるし、寛永版本よりも刈谷本との一致を示すケースが多い点も留意する必要がある。

五 『長短抄』と早大本系統

以上を踏まえて、改めて『長短抄』と『竹園抄』の関係を早大本系統の本文から考えてみたい。『長短抄』には『竹園抄』を盗用したとおぼしき箇所が少なからず存することはすでに述べたが、全体を通じて項目や連歌例の提示を含めて、本文を連歌向けに変更している。当然『竹園抄』の本文と『長短抄』の記述は少なくない異同をみせ、諸本中比較的『長短抄』に近いと思われる早大本系統とも大きな隔たりをみせるのである。次に、風傍病の箇所について早大本を寛永版本と刈谷本で校合を加え、『長短抄』と比較してみよう。

〈早大本〉

此歌、風情もやさしくて、よきうたといひさためられしかとも、風傍の病のかれかたくてまけにさためられぬ。いかにいり日は雲にうつるとも、紅葉をはみせてこそよかるへきに、入り日の雲や紅葉にてあるらむとよめる、

題の為にはめんほくなき歌なり。

【校異】風情―風体（版）、さためられ―さたあり（刈）、めんほくなき―おもしろくもなき（刈）

〈長短抄〉

此哥、風鉢ヤサシケレトモ風傍ノ難ノカレカタシ、イカニ入日ハ雲ニウツルトモ紅葉ヲハミセテヨカルヘキニ、入日ノ雲ヤ紅葉ナルラントヨムトキハ題ノタメニハ無面目也、此等ニテ可心得。

傍線部が長短抄にない部分である。「此等ニテ可心得」は『竹園抄』にない。『長短抄』は竹園抄をほぼ引き写したような箇所と、略述する箇所と、大異をもつ箇所に分かれるようであり、小異については詳細な校合が不可能なほど多数存する。また、早大本系統が二本とも末流伝本であることもあり、刈谷本と早大本の両者の『長短抄』との距離はまちまちである。一例を挙げれば、

〈早大本〉

六義九章のよき歌なるへし。

〈刈谷本〉

六義九章のはる、といへとも、かくのことく読んは能哥なるへし。

〈長短抄〉

六儀九章ヲハナルト云トモ、如此タランハヨカルヘシ。

とあつて、比較的刈谷本が近い箇所でもそれぞれに異同を生じている。また寛永版本と『長短抄』が一致するケースもあるので、単純に異同を比較する際には早大本系統だけではなく、木藤本や寛永版本を含め複数の伝本に目配りしながら考察していく必要がある。

ただ、『長短抄』と早大本系統の一致は無視できないものがある。それが第二節で論述した寛永版本および鎌倉期写本にも存在する「六返事跡事」の例歌四首の欠落が一致する点である。『長短抄』では、「我ト同程ノ人ノ返事」の一首に傍書がみられるが、本文異同というより衍字と考えられ、四首の脱落は小さくない共通点である。

その一方で『長短抄』に大規模な省略引用があり、直接『竹園抄』と比較できない箇所も多い。『長短抄』で省略される箇所を「対言」（対語之句之事）で挙げると、次の例がある。

〈早大本〉

たとへは、上に桜といは、下にほふとも、さくはな、霞、木陰なと花にゑんあること葉を対すへし。上につ
きとあらんに、下に雲なしとも、さやけしとも対すへし。

この文が省略されている。これは具体的な例歌を挙げなかったので、削除したものでだろう。さらに「さくら花さきにけらしな吹く風もおへるかたになひくしら雲」の説明なども省略されている。もともと大きな省略は、六義中の「なにはつにさくやこのはな冬こもり今ははるへとさくやこのはな」詠の仁徳天皇と稚倉宮との位譲りの説話が『長短抄』では、

仁徳天皇之御位二即セ給ヘキ事ヲ、梅ノ花ニソヘ奉テ、王仁トイエル者ヨメリ、

とだけ記される。同様のケースは「さきくさ」の由来を説く条にも認められる。他にも「八懷紙可書事」（和歌之懷紙可書事）では、

〈早大本〉

有官の人は、官・性・名、無官の人は姓・名を書へし。僧は名、児は姓・名を書へし。尿部尾は名はかり書へき也。又、祝歌になりぬれば、三行三字書へし。

を落とす。これは『長短抄』が想定する受容者とは異なる位相の読者に向けて書かれているからだろう。この記述は明らかに『竹園抄』を踏まえているのだが、内裏院家への懷紙作法を取らず、女房の懷紙作法のみを取り上げているのも、『長短抄』が読者に武家を想定している連歌伝書であることを裏付けるかもしれない。⁽¹⁶⁾

もう一点、『竹園抄』が記述の典拠としてあげる「詞詠集」(他の書名で掲出される伝本も多い)と「無名抄」を落としている。「無名抄」は「本哥を取に四の様ある事」の末尾に出現する書名で、本来的には本歌取りの技法の權威を支えるものであった。これらの書名を削除するのは孫引きを恐れたからではなく、『長短抄』が、上巻の奥書に記されるように『竹園抄』からの記述を含めて「二條御所」での良基からの聞書ないし伝授に偽装しようという意図があるからだろう。權威の源泉が二条良基から直接に聞いた事である限り、そこに書承關係が入ることは望ましくないのである。

金子は『長短抄』の記載順が一、二箇所を除いて『竹園抄』と一致することから、「もと『竹園抄』を連歌に当てはめて説をなした一書が存し、それを伝えて『長短抄』を成したのではないかという疑問が生まれる。単純にその時々⁽¹⁷⁾の聞書を整理したというふうには考えにくい点がある」と述べている。この指摘に対応する次の記述を考えてみたい。
〈長短抄〉

題ニヲイテモ落題、片題、傍題トテアリ、知連ニハ落句、片句トアリ、此抄ニハ歌ノ如ク落題、片題トアリ、

ここから出てくる「此抄」は一見、『長短抄』自身を指しているように読める。だが末尾には「トアリ」と結ばれていることから『長短抄』自身を指すのではないとわかる。ここでは二条良基の『知連抄』が引かれており、それとも異なる一書として別の本を指している。その本が『長短抄』の引いた『竹園抄』であったのではないか。⁽¹⁸⁾ただ、本文を鑑みると『長短抄』のほうが『竹園抄』より詳細な注を付すことがある。

〈早大本〉

ほのくとおちの外山にきなくなり

しばしかたらへねくらさためて

此は、ほと、きすをよめる謠なり。昔の哥はなにとかたちおあらはさねとも、かくもよみ侍り。当世は、かゝるへからす。ほのくとおちといふは、おのひ、きなり。しはしといふは、いの響也。余これにてしるへし。

〈長短抄〉

昔ハカ様ニモヨメリ、近代ニハ嫌也、若更トノトヲキノ、共ニオノ響也、ナクナリトシハシノシ、共ニイノ響也、カタラエノへ、ネクラノネ、共ニエノ響ナリ。

『長短抄』にみられる「エノ響」の解釈は『竹園抄』における「余これにてしるへし」の「余」に対応する。『竹園抄』からの引用であればわざわざ一例のみを追加する必要はない。このような分析をわざわざ『長短抄』の作者が付すのは合理的ではない。もとより『竹園抄』の名前は『長短抄』には記されず、歌例の分析を丁寧に行う理由はないのである。

これは「此抄」、つまり『竹園抄』に近い記述をもっていた和歌連歌秘伝書の書承によるものではないだろうか。そうだとすれば、単に『竹園抄』伝本の探索をもつて、『長短抄』に迫ることは難しいことになり、『竹園抄』の記述をさらに分析・研究した別種の連歌論書の探索も必要となるだろう。金子も『竹園抄』から『長短抄』へという単純な書承は考えにくく、何か別の書物を挟んでいる可能性を指摘していた。¹⁹⁾『長短抄』以前に『竹園抄』の影響を受けた連歌論書があったとすれば、『竹園抄』の影響は鎌倉時代から室町期まで、現在想定されている以上の連続性をもち、さらに『竹園抄』の歌例そのものが研究対象となるような受容がなされていたことになるだろう。

六 おわりに

以上、早大本系統の『竹園抄』は同系統内であつても異同が著しく、早大本では他系統との接触が想定されることを明らかにした。しかし、島根大学蔵本のように極端な異同がある本文を除けば、『竹園抄』の伝本は多かれ少なかれ一定の流布本との共通本文を持つようであり、流布本系統との混態を以て系統における重大な欠点とするわけにもいかない。

これは、鎌倉期写本がいずれも小さくない異同を持ちながらも、流布本と共通する要素を多く持つ点からも裏づけられる。逆にいえば、流布本とされている寛永版本も多く、点で古態を残すようであるが、不合理な記述をもつ。流布本とされる伝本の系統を理解しなければ、『竹園抄』伝本研究における基準を立てることができない。寛永版本の分析は今後の『竹園抄』研究における重要な一作業となるだろう。

久松潜一は久松本が識語を持たない事から、『竹園抄』の原態に近い本であり、これを古態と考え為顕の著作であると認定しようとしたが、早大本系統では為顕ではなく為家の著作——それも為家を子息だと想定していた——だと誤解していた。早大本系統が『長短抄』に影響を与えた『竹園抄』であるならば、地下連歌師たちの間には正統的な歌道家と接触せず、京から隔離された特殊な環境で変容した歌学書や学知が流通していたことになる。²¹⁾

『竹園抄』を成立時点だけではなく、変容し続けながら受容されたテクストとみることで、為顕流の影響を推し量ることもできるのではないだろうか。そこに連歌の介在があつたことはもはや自明のことであろう。歌学と連歌学——そして物語古註——とが、正統的な歌道家から離れ、相互に影響を及ぼしながら伝授されていたのである。『長短抄』と『竹園抄』の問題は、地下連歌師たちの歌学受容を考察する上で説明すべき多くの課題を抱えている。

本稿においてはわずか二本の末流伝本を扱ったにすぎない。だが、その伝本群は『長短抄』との関わりと両本の関係において一様ならざる様相をみせていた。『竹園抄』は、こうした複雑な意図を一本ずつ丁寧に解きほぐすことで、伝本系統が明らかになる書物であろう。

そして、それらの系統ごとどのような場所、どのような人たちに受容されてきたのかを明らかにしていくことで、室町期の地下連歌師たちの活動や、和歌と連歌との関わりにおいても光をあてることができるのである。

【付記】

『長短抄』の引用は『天理図書館善本叢書 和書之部7 連歌論集』（天理大学出版部、一九七三）の影印に依り、伊地知鐵夫『連歌論集 上』（岩波書店、一九六四）を参考に翻刻した。寛永版本は早稲田大学図書館所蔵本（請求記号…文庫三〇 D 六四）に依った。『竹園抄』早大本と刈谷本は梅田径、浅井美峰「『竹園抄』翻刻——早稲田大学蔵本及び刈谷市中央図書館村上文庫蔵本——」（『早稲田大学図書館紀要』六六、二〇一九・四）に従った。いずれも私に句読点を附した。

図1は早稲田大学中央図書館蔵『竹園抄』（請求記号…文庫30・d0064）、図2は国文学研究資料館所蔵『竹苑抄』（和古書請求記号：11-128：CC BYS）A、図3は国立国会図書館蔵『竹苑抄』（請求記号：WA15-15）によった。様々な便宜を賜りました各機関に深くお礼申し上げます。

註

- (1) 三輪正胤『歌学秘伝の研究』（風間書房、一九九四）。
- (2) 久松潜一『日本歌論史の研究』（風間書房、一九六三）。
- (3) 註(1)三輪前掲書。
- (4) 人間文化研究機構国文学研究資料館編『中世古今和歌集注釈の世界 毘沙門堂本古今集注をひもとく』（勉誠出版、二〇一八）。

- (5) 石神秀晃「宮内庁書陵部蔵『金玉双義』翻刻併解題 上」(『三田國文』一五、一九九一・一二) 他。
 - (6) 海野圭介「『五蔵曼荼羅和会釈』と和歌注釈」(註(4)前掲書所収)。
 - (7) 古典籍総合目録データベースでは刊本・写本含めて一一四レコードを数えるが、架蔵本含め他に多数の伝本が存する。データ取得日…2019年12月4日。
 - (8) 拙稿「『長短抄』と『竹園抄』」(『日本詩歌への新視点 廣木一人教授退職記念論集』風間書房、二〇一七)。
 - (9) 梅田径、浅井美峰「『竹園抄』翻刻——早稲田大学蔵本及び刈谷市中央図書館村上文庫蔵本——」(『早稲田大学図書館紀要』六六、二〇一九・四)。
 - (10) 金子金治郎『金子金治郎連歌考叢3 連歌論の研究』(桜楓社、一九八四)。
 - (11) 註(8)前掲論文。
 - (12) 註(8)前掲論文。
 - (13) 『島津忠夫著作集 第五卷』(和泉書院、二〇〇四) 所収。
 - (14) 註(1)三輪前掲書。
 - (15) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』(明治書院、一九八七改訂新版)。
 - (16) 註(8)前掲論文。
 - (17) 註(10)金子前掲書、一五七頁。
 - (18) 廣木一人氏のご教示による。
 - (19) 註(10)金子前掲書。
 - (20) 註(2)久松前掲書。
 - (21) そうした学知が生成される場として、為顕流では伊豆山東谷、そして関東が浮かび上がってくる。注(1)三輪前掲書参照。
- (うめだ けい 早稲田大学非常勤講師／早稲田大学日本古典籍研究所招聘研究員／国文学研究資料館プロジェクト研究員)